

Some Additions of *Pseudixus japonicus*.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00065367

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



里見信生※ ヒノキバヤドリギ追記

N. Satami : Some Additions of *Pseudixus japonicus*.

東京の上野公園内にヒノキバヤドリギが生育している事は有名な事実で、古く S. M. の名 (松田定久?) で明治24年植物学雑誌第5巻に報ぜられた。又、江本義数氏が研究された (植物及動物; Vol.4: 1936) 材料はこのものである。然しながら、今では絶滅した様に聞いていたので残念なことと思っていたところ、科学博物館の丸山氏から今なお健在である由承り、且、御案内下さったのでそれを確めることが出来た。その御好意を深謝する。其の折、宇都宮市内にある事を承った。分布の北限であると思われる。丸山氏は博識の方であるから、一片の疑をさしはさむ余地は無いけれども、慾を言うと、その証拠物件としての標本を手に入れたいものである。免に角、栃木県というところは植物分布上面白い。この様な暖地性植物が応々にして存在する。マツバラ等も此の例に挙げられるものの一つである。

先に筆者は越智一男氏とヒノキバヤドリギの寄主目録を発表したが、(本誌 Vol. 2, No.3) 其の時、榎山庫三氏の「ヒノキバヤドリギの寄主」(野草 Vol.18, No.9) を引用したのであったが、次の20種は削除した方が良い事に気づいた。それらを列挙する。

Ginkgoaceae : イチョウ *Ginkgo biloba*Pinaceae : アカマツ *Pinus densiflora*, クロマツ *P. Thunbergii*Cryptomeriaceae : スギ *Cryptomeria japonica*Myricaceae : ヤマモモ *Myrica rubra*Fagaceae : コナラ *Quercus serrata*Ulmaceae : エノキ *Celtis sinensis* var. *japonica*Moraceae : イヌビワ *Ficus erecta*Malaceae : ナシ *Pyrus montana* var. *Rehderi*Amygdalaceae : ウメ *Prunus Mume*, サクラ *P. sp.*Rutaceae : サンショウ *Zanthoxylum piperitum*Euphorbiaceae : アカメガシワ *Mallotus japonicus*Anacardiaceae : ヌルデ *Rhus japonica*, ハゼノキ *R. succedanea*Alaliaceae : カクレミノ *Textoria trifida*Cornaceae : クマノミズキ *Cornus brachypoda*Ebenaceae : カキ *Diospyros Kaki* var. *domestica*Verbenaceae : ヤブムラサキ *Callicarpa mollis*Caprifoliaceae : ハクサンボク *Viburnum japonicum*

以上

この誤のはじまりは、恐らく長野菊次郎: ヒノキバヤドリギノ寄主 (植物学雑誌, No. 106, p.463~464) を引用する時、原文の「境内ノ木本植物大略36種ニシテ其中之カ寄主

※ 金沢大学理学部植物分類学研究室

タルモノ11種アリ即チ——ヲ附シテ之ヲ表ハス¹⁾と記してあるが、その中の——を附した11種以外のものをすべて寄主として挙げてしまったからと想像する。筆者の不注意をここに御わびして前報の目録を訂正する。又、其後知った寄主として、次の2種を追加する。

1. イスノキ 科学博物館腊葉標本 鹿児島産
2. ヤマモミジ 丸山氏 千葉県清澄山

両種とも、ヒノキバヤドリギの寄主として新しい種類であるばかりでなく、その属する科、Hamamelidaceae, Aceraceae はいずれもヒノキバヤドリギの寄主として新しい科であった。

そこで、あらためて前報にならい、20を除き2を加えた数について常緑樹・落葉樹の色わけをしてみると、下表の如くなって、常緑樹に寄生する%がずっと高くなった。

	落 葉 樹	常 緑 樹
前 報	30 (38%)	49 (62%)
削除、追加したもの	17 (28%)	44 (72%)

(p.44 より)

生状態にあるが、昭和20年頃、清水秀雄氏等が、このあたりから粟ヶ崎砂丘にかけ播種したものである。輪島附近にあると知られているイヌムギは、同町東部のはづれに相当あったが、南志見の里にもみられた(昭28)、シナガワハギは西海村は仁江一小浦出間一帯の海岸道路脇に広く分布していた(昭27)。

長柄他家男氏²⁾談によれば海岸地帯のマンテマ、ヨウシュヤマゴボウ、ノボロギク、ヒメムカシヨモギ、コバンソウ、ドクムギ等は何れも南より北上しつつあるという。内灘砂丘地にその一部を現在若干認めている。内灘砂丘地では栽植されたハリエンジュが年々繁殖し、砂丘地緑化の第一をなしている。コバンソウ群落は図表に示す如く現在(昭29春)は加能学園の東北方約800~900mに止って居り年々徐々に北上しつつある。コバンソウはその群落を必ずハリエンジュ林の中に作る。クロマツ林の中には全く生えられないし、又ハリエンジュ林の間の空弱地にも生えられない。ハリエンジュ林は始めここにナガハゲサ、ナギナタガヤ、オランダミミナグサ、ハタザオ、ハマハタザオ、ノボロギク、ヤブジラミ、ハマダイコン、スズメノヤリ等が生えるが、コバンソウの生えると同時に漸次これらは弱勢を余儀なくされ、之に先んじつつ北上している。従って粟ヶ崎よりの鉄道線路が海岸へ出た所附近のハリエンジュ林の下は殆どコバンソウのみの群落さえもみられる程である。

前報、理学部構内のドクムギは誤りでホソムギの由、里見氏に訂正された。半田賢龍氏も書いている(本誌 Vol. I, No. 4)。里見氏がハリゲタバコにつき書かれているから参照ありたし。(Vol. II, No. 2) なお奥能登の植物中の帰化植物については寺下氏の御研究に期待したい。〔奥能登の植物分類及び地理学的研究：13~121, 1953他〕

²⁾ 石川県河北郡七塚町小学校